方言多用地域における表現の多様性（2）
―介護施設利用者が「日常生活」場面で使用する方言について―

吉里さち子　大庭理恵子　和田礼子

キーワード：方言、看護・介護に従事する外国人、カ語尾、授与表現、音変化

概要

本研究は、看護・介護に従事する外国人が「聞いて理解する」ための熊本方言学習用アプリ教材の開発を目指すものである。教材作成に先立ち介護施設で働く日本人職員40名を対象に「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査を実施した。調査は共通語文を提示し、施設利用者がよく使う熊本方言に書き換えるというものである。和田・吉里（2022）では、「食事場面」で使われる熊本方言を分析対象としたが、本稿では「痛み・症状を訴える」「日常会話」の場面について分析した。

形容詞は、「食事場面」での結果と同様、カ語尾が使われていた。また、否定の助動詞「ない」は方言形ンが使われる。共通語では、形容詞の否定も動詞の否定も「ない」を使用するが、熊本方言では、形容詞の否定は「ナカ」、動詞の否定は「食ベン」（食べない）と、異なる形式を用いるため、外国人学習者にとってはバリエーションが増えることになる。

次に文法的要素を見ると「娘が服を買ってくれた」のような求心的方向の授与を表す際、クレルとともにヤルの使用が多くみられた。さらに「くれラシタ」「やラシタ」のようなバリエーションも加わり、その組み合わせは多様である。

質問紙調査では、「痛み・症状を訴える」表現として、共通語とは異なる語彙や表現についても尋ねた。回答には『日本方言大辞典』に記載のあるホーゲタ（頬）をフウゲタ、シリタブラ／シッタブラ（臀部）をシリカブタと記載するなど、身体語彙についても多様なバリエーションがあることがうかがえる。

さらに、本稿では接尾辞ゴタルの音声的多様性について検証した。ゴタルは「①～のようだ、②～したい」という意味で使われる。質問紙調査の回答を見ると、回答者によってその表記方法は様々であった。共通語ではこのような表記の揺れはほとんど見られないが、熊本方言では /ru/ は発音の仕方によって聞こえ方が異なるため、表記においてもこのような揺れが生じていると考えられる。熊本方言では、[ɾ] 音を弾き音ではなく、そり舌音的な [ɽ] で発音したり [ɾ] の子音自体が脱落したり、促音化する場合もあるため、/gotaru/ という言葉に関し、[gotaɾu][gotaɽu][gotaɽ] [gotat][gotaʔ] の発音が存在していると考えられる。本稿では、熊本方言話者が「いこゴタル（行きたい）」を4つのパターン、[ikogotaɾɯ][ikogotat][ikogota:][ikogotaɽ] と発話した音声を音声解析ソフトウェアに取り込み、その違いを視覚的に比較した。

また、「食べたくない」を意味するクオゴツナカは /kuogotu/ の部分で [kuogotu][kuogoɴ][kuogot][kuogoʔ] の4通り、/nai/ の部分では、[nai][naka][ɲa:] という3通りのバリエーションが見られた。

はじめに

本研究グループは熊本市を中心とする地域で使用されている方言を、看護・介護に従事する外国人が「聞いて理解する」ための方言学習用アプリ教材の開発を目指している。教材作成に先立ち、熊本市の介護施設で働く外国人介護職員へのインタビュー調査および日本人スタッフを対象

としたアンケート調査を行った。日常的に業務を連携して行っている日本人スタッフに対するアンケート調査の自由記述回答には、日常会話や利用者からの要求等の理解を阻害する要因が方言にあるという記述が多くみられた（吉里・和田・國澤 2022:69）。外国人介護職員へのインタビュー結果をまとめた國澤・和田・吉里・嵐（2022:63）では、業務場面では施設利用者の「要求・要望」「訴え」の聞き取り、生活場面では雑談の際の方言の聞き取りが難しいと指摘されている。これまで、外国人介護従事者の日本語の困難点の一つが方言であるという指摘はあったが、それが、どのような場面で起こるのかということがこれらの調査で明らかになった。

本研究グループが開発する、介護・看護に携わる外国人のための熊本方言学習アプリで使用する場面設定については、これらの調査により絞り込みができた。本研究はその場面に多用される「方言形式」を取り出すための基礎研究として位置づけられる。

本稿は介護施設で働く日本人職員40名を対象に実施した「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査について分析したものである。「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査の概要を表１に示す。

表１　「利用者がよく使う熊本方言」調査の概要

調査の時期	2021 年 3 月
調査対象	熊本市の介護老人保健施設で働く介護福祉士、理学療法士、作業療法士、 看護師、介護支援職員 40 名
調査方法	質問紙調査（記述式）
調査内容	『専門日本語入門　場面から学ぶ介護の日本語』（海外産業人材育成協会）から、「食事」「痛み・症状を訴える」「日常生活」の場面で使われていることば、文（共通語）を抽出し、これを「施設利用者からよく聞く熊本方言」に変換して記述してもらう。 ◆質問形式 ・提示文の言いかえ 利用者がよく使う熊本弁を、できるだけ自然な文の形で書いてください。 （例）痛みが少し取れた　→　いたかつが　ちっと　よーなったばい 力が入らない　→　力のはいらんもんね ・会話文完成 次のような会話の時、利用者はなんと返事をしますか。 返事の部分を熊本弁で書いてください。 （例）介護士：　もうすぐお食事ですよ。 利用者：　きょうんめしはなんね？　（今日のご飯は何ですか。） ・自由記述 痛み・症状に関連して、よく聞く熊本弁を自由にお書きください ◆提示文（抜粋） ・昨夜は眠れなかった　・少しずつ良くなっているようだ ・自分でできる　・忘れてしまった　・食欲がない ・まぶしい　・食欲がない　・腕がだいぶ動くようになった ◆ひらがな表記の際の注意 ・方言をひらがなで表記する際、例えば、「いいえ」は「ぅんにゃ」のように、できるだけ実際の発音に近い形でご記入ください。

和田・吉里（2022）では、本調査で収集したデータの中の「食事場面」で使われる熊本方言を分析対象としたが、本稿では「痛み・症状を訴える」「日常会話」の場面について分析する。

本稿は和田・吉里（2022）同様、熊本方言の多様性を指摘することで外国人介護スタッフへの方言学習の必要性を主張するとともに、教材化に向けた学習項目の洗い出しを行うものである。以下、熊本方言を含む文について本稿では熊本方言部分をカタカナで表記する。

Ⅰ．形容詞

和田・吉里（2022）では、食事場面で提示した形容詞文「スプーンがない」「食材が固い」「味が濃い」「食事の量が多い」は、方言形ナカ、固カ、濃ユカ、多カのようにカ語尾へ完全に交替していることを確認した。本稿の「痛み・症状」「日常生活」でも、マバイカ（まぶしい）、痛カ（痛い）、だるカ（だるい）、ナカ（ない）となり、共通語形「－い」は用いられてない。形容詞のカ語尾は、熊本方言を知るうえで、非常に有益な情報である。既に、日常的に熊本方言を聞いている外国人介護従事者の多くが、この形式を耳にしたことがあると考えられるため、熊本方言入門期の学習項目として扱うべきものであると考える。

形容詞の連用形は⑫マバユーシテ（まぶしくて）、⑭いトウシテ（痛くて）、⑲だるゥシテ（だるくて）等、ウ音便が観察された。他に、和田・吉里 (2022；100) で指摘した、⑭「（おなかが）痛い」の「いチャー」、㉒「（食欲が）ない」の「ニャア」のような連母音 [ai] を含む音のイ語尾への交替も観察された。

さらに、㉒「食欲がない」は「食べたくない」という意味の熊本方言に書き換えられており、この場合、本動詞が「食べる」と「食う」に分かれる。「～たくない」を意味する方言形式にはゴツナカ、ゴッナカ、ゴンナカといったバリーションがあるが、これについては2節で詳細に分析する。

また、「食べたくない」という意思を表現するため、「くいキラン（食べられない）」や「たベンデモヨカ（食べなくていい）」という別の表現に置き換える例もみられた。「くいキラン（食べられない）」では、能力可能を示す助動詞の方言形キル、「たベンデモヨカ（食べなくていい）」では、不必要を表す「～なくてもいい」の方言形～ンデモヨカとその音変化の「～ンチャヨカ」も用いられている。共通語でも「食欲がない」ことを訴える場面で「食べたくない」「食べなくていい」「食べられない」など、さまざまな表現形式の出現が予想されるが、方言学習教材には、これに対応する方言形式を、音のバリエーションも含め、学習項目として提示する必要がある。

表２　形容詞文⑫、⑭、⑲、㉒の回答

「利用者がよく使う熊本方言」として書かれた文（下線はカ語尾）	共通語訳
⑫まぶしい	
マバイカ、マバイカナァ、マバユカ、マバユカネ、マバユカナ ／マバユーシテ、まぶシュウシテ ／シバシバする	まぶしい ／まぶしくて ／ちかちかする

⑭おなかが痛い	
おなか／はら／はらんやつ └が／ノ／ン └いたカ、いチャー、 ／いたカナー、いたカッタイ、いチャートタイ ／いたカゴタルケン、 ／いトゥシテ └イカン ／グジングジンす ／イカン ／セク	おなか └が └痛い ／痛いのよ ／痛いみたい ／痛くて └ダメだ ／ズキズキする ／だめだ ／痛む
いトゥシテいトゥシテ	痛くて痛くて
⑲（体の部位）がだるい	
足、体 └ノ、ン、ン、が └だるカ、だラシカ、だらしカッア、だリィ、だッカ、重い、重カ、きつカ、痛カ、けだるカ、しんどカ ／だるカタイ ／だるぅシテ、きつシテ ／だるカゴタル ／イゴカレン ／ガホンナカヨ	（体の部位） └が └だるい ／だるいんだよ ／だるくて ／だるいみたい ／動けない ／力が入らない
㉒食欲がない	
ごはん、食欲、めし、はら、食べる気色 └ノ、は、ン、が、も、や、ジャ、φ └ナカ ／たベトウナカ、たべよゴツナカ、たべるゴツナカ、たブゴツナカ、クオゴツナカ、クオゴッナカ、クオゴンナカ、クウウヲゴツナカ、クォゴツニャアクオゴツニャーネ ／くうきガセン（食う気がセン） ／すかン、ヒカン ／へっとらん、すいトラン ／ヒカントタイ ／いっピャア	食欲 └が └ない ／食べたくない ／食べる気がしない ／（腹が）すかない ／（腹が）空いていない ／（腹が）空かないんだよ ／（腹）いっぱい
φくいたくない ／くいキラン ／くいキランゴタ ／たベンデヨカ、たベンチャヨカ、くわンチャヨカ ／いけン、いらン ／いけンゴタル、いけンゴタッ ／ひもジュウナカ、ヒダルンナカ	食べたくない ／食べられない ／食べられなさそう ／食べなくていい ／いらない ／進まないみたい ／ひもじくない

Ⅱ．否定の助動詞「ない」を含む文

否定の助動詞「ない」を利用者がよく使う熊本方言を用いた文に変換した場合、例えば、動詞「合わない」はアワンとなる。本調査で提示した助動詞「ない」について見るとすべての提示文において、方言形の否定の助動詞ンへの交替が見られた。

表２の否定の助動詞「ない」を含む文を見ると、まず、格助詞「が」が方言形ノやンへ、同じく格助詞「の」が方言形ンへ交替がしている例が見られる。否定の助動詞の方言形ンに置き換わった後も、文末詞など後続の表現や、婉曲的な表現等が使用され、表現が多岐にわたっていることがわかる。

㉕「入れ歯があわない」の格助詞「が」、㊷「テレビの音が小さくて聞こえない」の連体助詞「の」、㉗「体の部位に力がはいらない」の副助詞「に」は、方言形ノやンへの交替が起こりやすくなっている。一方で、㉛「昨夜は眠れなかった」にある副助詞「は」は方言形への交替は起こっていない。

また、表２では、否定の助動詞の方言形ンに続く文末詞として、ケン、ゴタ、ゴタル、ゴツナッタ、タイ、タイナ、ト、トタイ、トタイナ、ナー、バイ、モン、モンナ、モンネの14の文末詞が用いられている。これらの出現に関しては、話し手の発話意図が大きく影響しているため、共通語の終助詞同様、様々な形式が表れることはある程度予測できることであるが、説明の「ト」、やや主観的な念押しの「バイ」、やや客観的な念押しの「タイ」、詠嘆の「モン」等（いずれも、秋山・吉岡（1991：204-206））、基本的な意味と使い方を知っておくことも必要になってくる。

その他、別の表現を用いて強調する文もあった。㉕「入れ歯が合わない」の「入れ歯ノオッ取るッ（入れ歯が取れる）」や、㊳「覚えていない」の「そギャンタ、ウッツァすれた（そういうことはすっかり忘れた）」等である。神戸（1992）では、方言形の接頭辞オッやウッはいずれも強調する際に用いられるもので、オッに関してはトル（取る・盗る）、トルル（取れる）の２語にしか現れない。それに対して、ウッは多様な動詞に現れるが、「ワスルル（忘れる）」に関しては、ウチに続くのが基本であると述べている（神戸、1992：359-360、365）。さらに、今回の回答のように、促音化して「ウッツァすれた」というような音として認識される例もある。これらの文のように発話した際に、介護従事者が何を意味するのかを瞬時に理解することはたやすいことではない。様態のゴタルを用いたり、接頭辞ウッやオッに接続して動詞が表れたりする場合、動詞の一部が理解出来れば、後続の否定の助動詞が方言形ンに替わっても、予測して理解することができる可能性はある。しかし、㉘「～ができない」がシキラン、㊷「テレビの音が小さくて聞こえない」の「聞こえない」が耳ランや耳イラン（「耳に入らない」）等、全く違う語へ替わってしまうと、予測の域をこえる可能性が高い。㉘の可能を表す助動詞キルは「食ベキル（食べられる）」等、能力可能の意味を表し、状況可能は「食ベラルル」となる。共通語では、能力可能も状況可能も同じ語形で表すが、熊本方言では使い分けが必要となるため、代表的な形式の一つとして、学習する機会があることが望ましい。

加えて、共通語では、形容詞の否定も動詞の否定もどちらも「ない」を使用するが、熊本方言へと切り替わると、形容詞の否定は「ナカ」、動詞の否定は「食ベン」（食べない）と異なる形式を用いる。これは、新たに熊本方言を学ぼうとしている技能実習生を含む外国人には大変な負担である。

表３　否定の助動詞「ない」を含む文

「利用者がよく使う熊本方言」として書かれた文	共通語訳
㉕入れ歯 が あわない	
歯／（下ン）入れ歯 └ノ／ン・ン ／が └あわン、あわンタイ、あわント、あわントタイ、あわンケン、 あわンゴタ、あわンゴタル、 あわンゴツナッタ、あわンタイナ、 ／噛み合わン ／あっテランゴタ、オートラントタイ ／オッとルッ（おっ取るっ） ／ぐらぐらする、だがだがスッ ／ゆるカ ／グラグラして └くわれンバイ	入れ歯 └が └あわない、あわないんだよ、 あわないみたい、 あわなくなった、あわないんだよね ／かみ合わない ／あってないみたい、あってないんだ ／とれる ／ぐらぐらする ／ゆるい ／グラグラして └食べられないよ
㉗体の部位に 力が はいらない	
足、身体、こっちの指、手、右手 └に、ノ、ン └カ └ノ／ン・ン／が └はいらン、はいらントタイ、 はいらントタイナ、はいらンモンネ、 はいらンバイ、はいらンタイ、はいらンケンイケン ／イラン	（体の部位） └に └カ └が └入らない、入らないんだよ 入らないんだよね、入らないよ 入らないからダメだ ／入らない
体 └に └性根（しょうね） └ガ └ナカ	体 └に └カ └が └ない
ドンコンナラン	どうにもならない
ガホンナカ	力が入らない
ダルカ	だるい
㉘～ができない	
～が、ノ、は、そギャンコツァ、そギャンナ、も ／コラ └できン、でケン、シキラン、シーキラン、 ／できンタイ、できントタイ、でケンバイ、でケンモン、シキランバイ ／できンモンナ ／でケンナー ／できンゴタ	～が ／これは └できない、 ／できないんだよ、 ／できないんだよね ／できないねー ／できないみたい
㉛昨夜は眠れなかった	
昨日、昨日の晩、昨日ン晩、昨日ン夜、昨晩、晩、前晩、ゆうべ、ヨサル └は └アンマ ／イッチョン、ウート　イッチョン ／ヨウ、ユート └寝ラン、寝トラン、 ／寝キラン、寝ラレン、寝レン ／眠れン、眠ラレン、眠ラン、 └カッタ、ダッタ、ヤッタ、ヤタ、ジャッタ └バイ、タイ	昨夜 └は └あまり ／全然 ／よく └寝ない、寝てない、 ／寝られない ／眠れない └かった └よ
何回も └目ン └覚めたモンナ	何回も └目が └覚めたんだよね

㊳覚えていない	
イッチョン、キャア、 ／そギャンタ ／もう ／ヨ～ト、ヨウ ／ワタシャ └覚えトラン、覚えチャオラン、覚えチョラン、覚えン ／わからン ／しらン ／わすれた、ウッツァすれた	全然 ／そういうことは ／もう ／よく ／(私)は └覚えていない ／わからない ／知らない ／忘れた
記憶ン └ニャア	記憶が └ない
㊷テレビの音が小さくて聞こえない	
テレビ └の、ン └音、声 └ノ、ン、が └小さくて、小さカケン、小ソウテ、小ソシテ ／コマカ、コマカくて、コマカケン、コマシテ、コマクテ、コマモシテ コマンカケン、コモシテ、コーモシテ、コモーシテ └イッチョン └聞こえン ／耳ラン、耳イラン ／わからン └タイ、トタイ、タイナー	テレビ └の └音 └が └小さくて └全然 └聞こえない ／耳に入らない ／わからない └んだよ、のよ
何テ └言いヨラスか └わからン	何を └言っているか └わからない

Ⅲ．授与表現

本調査では、日常生活の場面で物のやりとりについて述べる「娘が服を買ってくれた」という授与表現を含む文を提示した。「利用者がよく使う熊本方言」へ書き換えた文では、表４のように「買ってやラシタ」等のヤル系、「コウテくれた」等のクレル系、「(娘に) コウテモロタ」のモラウ系が採集された。その他、「(娘が) コウテきた」等授与表現を含まずに授与の意味を担う無標系などが採集された。

この現象を裏付けるものとして、図１の『日本語言語地図』第74図を確認しておきたい。図１において、熊本県は多くの地点で●のヤル、✚のクルル、▲のクレルが併存しており、他県に比べ多様な形式が混在していることがわかる。共通語では授

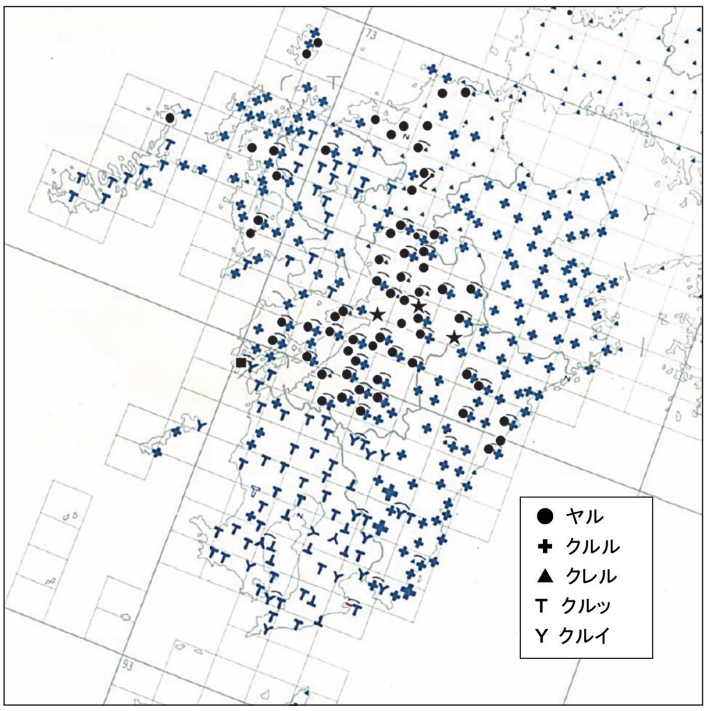

図１．『日本言語地図』LAJ 第74図「くれる」
(九州部分抜粋・一部改変)
質問文：よその人が自分に物を渡すことをどうすると言いますか。
友達が、私に、たばこを一本どうすると言いますか。

与動詞「くれる」が話者への求心的方向を表すが、日高（2007；309）によると、熊本市など九州中部では「ヤル」が物のやりとりを表す基本的な動詞として機能しているため、求心的方向、遠心的方向のどちらも「ヤル」がその役割を担うことができるという。

また、日高（2007；111）は九州中部に位置する熊本県は、求心的方向を表す授与動詞として「ヤル」を用いる九州北東部と、「クレル」を用いる九州南西部の両方に接する地域であると指摘している。これを裏付けるように、表４の本調査の回答は、それぞれの地域からの影響を受け、どちらの形式も許容する地域となっている。共通語文で「娘が服を買ってくれた」という求心的方向を示す「くれる」が提示されていても、熊本方言への書き換え文にはクレル系とヤル系の両方が現れたのは、このためだと考えられる。

表４では、動詞に接続し、動作主が他者であることを表す助動詞ラスを用いた文が散見されるが、特にヤル系での使用が多い。ラスは動詞に後接し、動作主が他者であることを表す。ヤルは遠心的方向にも求心的方向にも用いられるため、求心的方向、つまり動作主が他者であることを明確にするために、ラスが多用されていると考えることができる。

また、表４に示した㊶「これ、娘が買ってくれたんだ」の熊本方言書き換え文は全部で41例であった。重複したのは「娘がコウテきた」の一文のみで、その他は全て異なる文となっていた。主語の「これは」にあたる部分では、コイ、コラ、コルは、コッは、コッバ等の音変化や助詞の交替が起こり、「娘が」は主格の「が」で方言形のノやンへの交替が生じている。述部の「買ってくれたんだ」の部分では、以下のような表現の階層が表れていると考えられる。

１）授与表現「やる／くれる」＋第三者の行為を表す助動詞ラス：娘ノやラシタ、くれラシタ
２）本動詞「買う」＋移動を表す補助動詞「来る」: 娘がコウテきた等
３）本動詞「買う」＋授与表現「やる／くれる／もらう」＋第三者の行為を表す助動詞ラス：娘がコウテやラシタ、娘にコウテモロタ等
４）本動詞「買う」＋移動を表す補助動詞「来る」＋授与表現「やる／くれる」＋文末詞：娘がコウテきてくれたッタイ等
５）本動詞「買う」＋移動を表す補助動詞「来る」＋授与表現「やる／くれる」＋助動詞ラス：娘ノコウテきてやラシタ

本動詞「買う」は、すべて方言形の連用形コウテ、コウチが使われており、補助動詞も授与表現「やる」「くれる」「もらう」と移動表現「くる」の４つの形式が使い分けられている。また、ラスや文末詞の有無で限りなくその組み合わせを広げることができる。41件の回答のうち同一の回答は１件しか現れず、その他多様な形式を組み合わせて文が作られるということができる。外国人介護従事者は、熊本方言話者の発話を聞いて理解することが求められているが、多少の形式の違いに振り回されず、基本的なメッセージを逃さず理解できるようになることを目指す教材が求められる。

表４　授与表現を含む文㊶の全回答（n=41）

㊶これ、娘が買ってくれたんだ		
■ヤル系(12件)	■クレル系(15件)	■無標系(10件)
φ　娘が　コウチャった	これは　娘ノ　くれラシタ	コッバ　娘が　かったタイ
コラ　娘が　コウテやったっタイ		
	コラ　娘が　コウテくれた	φ　娘が　コウテきた(2)
これは　娘ノ　やラシタ	こルは　娘ノ　コーテくれた	φ　娘ン　コウチきた
φ　娘が　かってやラシタ	これ　娘ノ　コウテくれた	コイ　娘が　コゥチきた
コラ　娘が　コウテやラシタ	これは　娘が　コウテくれた	コラ　娘ノ　コウテきた
コッは　娘ン　コウテやラシタ	φ　娘が　コウテくれた	
コラ　娘ン　コウーテやラシタ		φ　娘ノ　コウテきたっタイ
	φ　娘が　コーテくれたバイ	φ　娘ノ　コウチきたっタイ
コッは　娘が　コウテやラシタト	φ　娘が　コウテくれたタイ	コッバ　娘が　コウテきたツヨ
コッバ　娘が　コウテやラシタっタイ	φ　娘が　コゥテくれたトヨ	コラ　娘が　コウテこラシタ
これ　娘が　コウテやラシタっタイ	φ　娘ン　コウテくれたっタイ	φ　娘が　コッバ コウテこラシタ
コラ　娘ノ　コウテやラシタっタイ	これ　娘が　コウテくれたっタイ	
φ　娘ノ　コウテきてやラシタ	これ　娘が　コウテくれたトヨ	
	コラ　娘ン　コーチくれたツバイ	
■モラウ系(1件)	φ　娘が　コウテくれったっタイ	
φ　娘に　コウテモロタ		
	これは　娘が　コウテきてくれた	
	φ　娘が　これバ コゥテ きてくれたっタイ	

Ⅳ．語彙（身体・痛み・症状）

痛み・症状に関連して「利用者がよく使う熊本方言」として109件の回答を得た。このうち、身体語彙を二階堂他（2016）「熊本支援方言プロジェクト：身体語彙図」に提示されているものと比較したところ、以下の語彙については「熊本支援方言プロジェクト」には記載されていなかった。

1）アドボウズ（かかと）
2）シリカブタ（臀部）
3）ツ（かさぶた）
4）デコ／ムコヅラ（額）
5）トッペン／トッパサキ（つま先）
6）フウゲタ（頬）
7）ヒザボンサン（膝）

このうち、アドボウズ（かかと）、シリカブタ（臀部）、フウゲタ（頬）、は、「熊本支援方言プロジェクト」には、アド、シリビタ、ホーゲタとして採録されているが、『日本語方言大辞典』では７件中「かかと、臀部、かさぶた、頬、膝」の５件、『熊本県方言辞典』では一部異なる記述もあるが７件全ての身体語彙が取り上げられていた。

2）のシリカブタについては、『熊本県方言辞典』にシリカブまたはシリタブラ等の掲載はあったが、シリカブタの掲載はなかった。他に、臀部関連の語彙ではシリタブラという語も掲載されており、シリカブタはシリカブかシリタブラのどちらかが音変化したバリエーションの一部だと捉えることができる。

3）のツ（かさぶた）はツーと発音する例もあがっており、広く使用されている語であることが分かった。

4）のデコ／ムコヅラ（額）を表す語については、『熊本県方言辞典』にはデコ、ムコヅラのうち、ムコヅラのみ記載されておりデコでの記載はなかったが、デコチンという表現が掲載され

ていた。これは、デコチンの接尾辞チンが落ちて、デコのみが残っているために現れた現象であると考えることができる。

5）のつま先を表すトッペン／トッパサキは、『熊本県方言辞典』ではつま先そのものというより、てっぺん、突端、先端の意味を表す語として書かれており、その概念が拡張し、つま先を表すようになったと考えられる。

6）のフウゲタであるが、『熊本県方言辞典』にはフーゲタで記載されていた。また、フーゲタのフーは合音ホオのウ段音化から生じているとしている（p.1167）。

7）の「ヒザボンサン」について、『熊本県方言辞典』では膝にお坊さんを表すボンサンが付いたものだとしている。また、「ボンサンはお坊さんのこと。ヒザにボンサンを付したのは、膝が丸いところから、お坊さんの丸い頭との連想によるもの」（p.1370）とある。これは、アド（かかと）にボウズが加わった1）のアドボウスの成り立ちにも同様の流れがあるものと思われる。

これらの情報をまとめると、以下の表のようになる。

表5　「よく聞く熊本弁」の回答のうち、「熊本支援方言プロジェクト」に記載のない身体語彙

（○は掲載あり、―は掲載無し）

「よく聞く熊本弁」	「熊本支援方言ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」	『熊本県方言辞典』	『日本方言大辞典』
1）アドボウズ（かかと）	アドのみ	○	○
2）シリカブタ（臀部）	シリ、シリベタ ジゴ、シリビタ等	シリカブ または シリタブラ	シリタブラ または シッタブラ
3）ツ（かさぶた）	―	○	○
4）デコ／ムコヅラ（額）	―	デコ→デコチン ムコズラ○	―
5）トッペン／トッパサキ（つま先）	―	○	―
6）フウゲタ／フーゲタ（頬）	―	フーゲタ	ホーゲタ
7）ヒザボンサン（膝）	―	○	○

表5から、2）のシリカブタや4）のデコなど、質問紙調査の記述が既出の文献と同一ではないものもあるが、これらについては音のバリエーションとして捉えることができる。

これらの語彙がすべて熊本の日常で頻出するわけではないが、『日本方言大辞典』や『熊本県方言辞典』に掲載された語の中でも、本調査で回答された語彙については、介護の場面で日常的に見聞きする可能性があることを示唆している。

Ⅴ．熊本方言における音声の多様性

1．「ゴタル」のバリエーション

本節では接尾辞「ゴタル」の音声的多様性について考察する。「ゴタル」は秋山他（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』（p.21）には、「「如くある」の転化」とある。「如くある」のウ音便で、「～のようだ」（様態・婉曲）や、「～したい」（行為の欲求や希望）という意味を持つ。アンケート調査の回答の中にもクオゴタル（食べたい）の他、自分の状況を訴える場面で使用する痛カゴタル（痛いようだ）、ご飯の多カゴタル（ご飯が多いようだ）、入れ歯ノ合わンゴタル（入れ歯が合わないようだ）など、婉曲的表現である「ゴタル」が多数見られた。実際、「少しずつ良くなってきているようだ」の設問に対しては41名中22名がヨーナッタゴタルのように「ゴタル」を使用した表現で回答していた。回答にあった「ゴタル」の例を表6に挙げる。

表６　アンケートにおける「ゴタル」の使用例

アンケートの質問項目	熊本方言	共通語訳	用法
食事をとる	ご飯ばクオゥゴタル	ご飯を食べたい	～したい（行為の欲求や希望）
スプーンがない	さじンナカゴタル	さじがないようだ	～のようだ（婉曲）
食事の量が多い	おおカゴタ	多いようだ	
食材が固い	噛めンゴタ	噛めないようだ	
歯にしみる	歯のチッタアしみるゴタ	歯が少ししみるようだ	
歯がぐらぐらする	歯のトルッゴタァ	歯が取れそうだ	
体の部位がしびれる	手のシブルッゴタ	手がしびれるようだ	
食欲がない	クイキランゴタル	食べられないようだ	
食欲がない	ご飯のイケンゴタッ	食欲がないようだ	
痛い	痛カゴタル	痛いようだ	
動くようになった	動くゴツなったゴタッ	動くようになったようだ	
よくなっているようだ	ヨウなってキヨルゴタア	よくなってきているようだ	
体調がよくない	体のあんまりよくナカゴタル	体があまりよくないようだ	

表７　「ゴタル」の多様性『九州方言の基礎的研究』より抜粋 p.87

ゴタイ	ゴタル	ゴチャル	ゴトアル
ゴツァル	ゴッアル	ゴタッ	ゴタン

本稿では本研究グループの熊本方言話者が、記述された回答を声に出し、内省することによって音声記号への変換を行った。記述方式のアンケート質問紙調査の回答を見ると、ゴタルの部分だけでもゴタル、ゴタ、ゴタッ、ゴタアと回答者によってもその記述方法は様々であった。また『九州方言の基礎的研究』にもゴタルの多様性が明記されている（表７参照）。共通語では一つの語彙に対して、このようなバリエーションは見られない。

ゴタルの語末の /ru/ の表記については、熊本方言では発音の仕方によって聞こえ方が異なるため、揺れが生じていると思われる。『九州方言の基礎的研究』には、熊本方言では「弱母音化法則により狭い後母音は、曖昧微弱な中舌母音的なものになるか脱落するのが強固な法則である。」と記述されている。語末の /ru/ については熊本方言話者の自然談話を分析した大庭 (2015) にも、「する」が「スッ」のように促音化している例や、「通んナハル（お通りになる）」の /ru/ がそり舌音的な [ɽ] で発音されているという例が挙げられている。このように、熊本方言では、[ɾ] 音を弾き音ではなく、そり舌音的な [ɽ] で発音したり [ɾ] の子音自体が脱落したり、促音化する場合もあるため、/gotaru/ という言葉に関し、[gotaɾɯ][gotaɽu][gotaɽ][gotat][gotaʔ] の発音が存在していると考えられる。

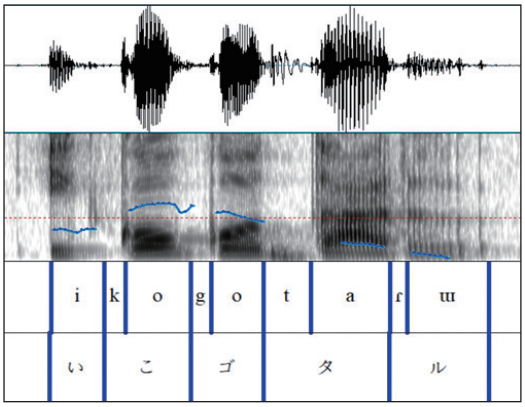

図２　[ikogotaɾɯ] の図

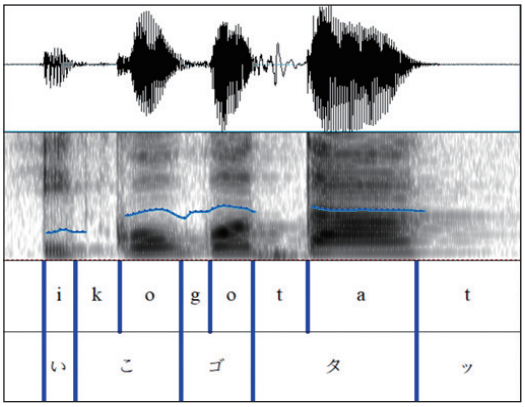

図３　[ikogotat] の図

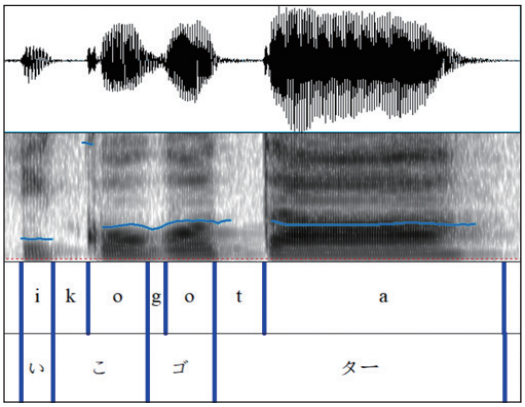

図４　[ikogota:] の図

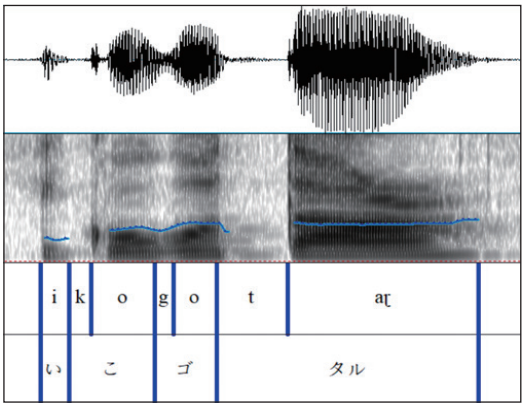

図５　[ikogotaɽ] の図

実際に、熊本方言話者の「いこゴタル（行きたい）」という発話を、[ikogotaɾɯ][ikogotat][ikogota:][ikogotaɽ] の４パターンで発話し、その音声を音声解析ソフトウェア Praat version 6.1.39 (Boersma and Weenink) に取り込み、その違いを視覚的に比較した。

図２～図５からも明らかなように、「ゴタル」の「ル」部分に顕著な違いが見られる。図２は「タ」の母音 [a] の後に、子音 [ɾ] と母音 [ɯ] がある。図４は「タ」の母音が図の２倍ほど長く発話されているのが分かる。また、図２及び図５はどちらも仮名表記では「いこゴタル」となるが実際に発話された音声を Praat で見てみると図５では「タ」の母音 [a] の途中から [ɽ] の音へ移行しており、図２との違いは明白である。このように「ゴタル」の発話音声においても熊本方言にはさまざまなバリエーションが存在していると言える。

２.「ゴツナカ」のバリエーション

秋山他（1991）にあるように、「ゴタル」は「如くある」の転化であるとするならば、「如く」と「ある」に分けて、その音転化を考えてみると、以下のようになる。

第一段階として、/gotoku/ の /ok/ が脱落し、/gotu/ となる。第２段階として、/gotu/ の /u/ が脱落し、/got/ となり、/aru/ が接続する。一方、ゴツナカは願望を表すゴタルの否定形として出現する。「如くある」の否定形として「如く」に「ない」が接続することで /gotoku/ が /gotu/ や /got/、更には、後続子音の /n/ に影響を受け /gon/ の音に転化している。「ない」の部分はカ語尾の /naka/ や、『九州研究の基礎的研究』にも記述があるとおり、母音 [ai] が [ja:] に変化し、/nya:/ と発音されている。大庭（2015）にも自然談話の中で「申し訳ない」が「申し訳ニャー」、「いっぱい」が「いっピャー」と発話された例が挙げられている。「ゴタル」と「ゴツナカ」の音転化を図式すると図６、図７のようになる。

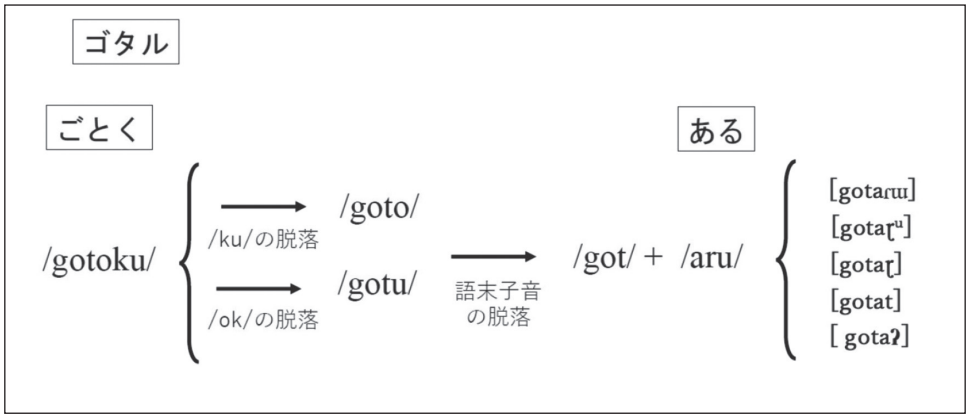

図６　「ゴタル」の音転化

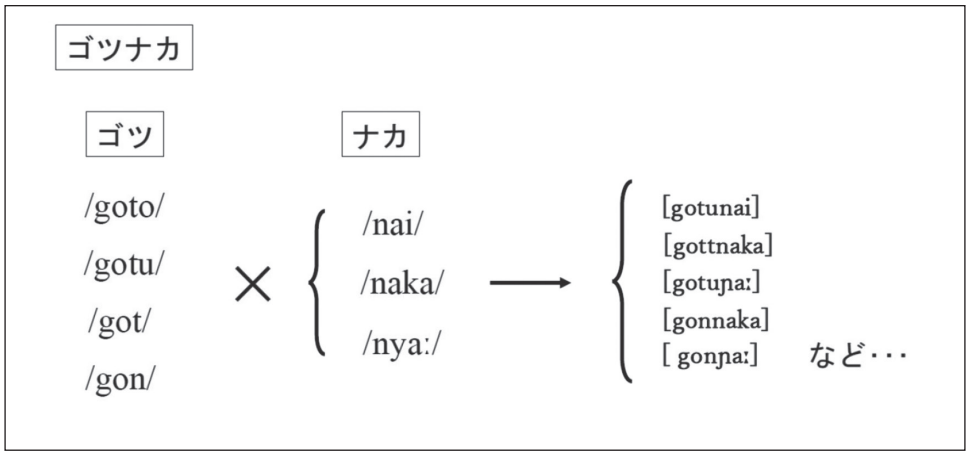

図７　「ゴツナカ」の音転化

「食べたくない」を「施設利用者からよく聞く熊本方言」で何と言うか、という問いに対する58件の回答のうち、半数弱の25件が「如く＋ない」の表現を使用しているが、その表出形式は多岐に渡っていた。結果を表８に示す。

表８　「食べたくない」の回答例

回答例	件数
食べよゴツナカ	5
クオゴッナカ	5
クオゴツナカ	3
クオゴンナカ	2
食べよゴンナカ	2
食うゴンナカ	2
クオウゴツニャ	1
クオゴツニャー	1
クオゴッニャー	1
食べようゴツナカ	1
食うゴツナカ	1
食べゴツナカ	1

表９　「ゴツナカ」のバリエーション[1]

ゴツ		ナカ	
/gotu/ ゴツ	13	/naka/ ナカ	22
/gon/ ゴン	6	/nyaː/ ニャー	2
/got/ ゴッ	6	/nya/ ニャ	1

[1] アンケートで得られた回答は「ごつなか」「ごつにゃー」のようにひらがな表記であったが、音韻分析のため音韻記号で表記した。

また、表８に出てきた「如く＋ない」の表出表現をさらに「ごとく」と「ない」に分けたところ、「ごとく」では、25件中、/gotu/ が13件、/gon/ が６件、/got/ が６件だった。「ない」では、25件中、/naka/ が22件、/nya:/ が２件、/nya/ が１件という結果となった（表９参照）。

今回は「ゴタル」「ゴツナカ」を取り上げ、熊本方言特有の音声のバリエーションを検証したが、このような多様な音変化が熊本方言には存在し、これが音の聞き取りや聞き分け、意味理解を難しくしている一つの要因となっていると言える。

Ⅵ．結論

本稿では、介護施設利用者の発話として提示した文を、日本人の介護施設職員が「施設利用者からよく聞く熊本方言」に変換して記述した文を調査の対象とし、特に、痛みや症状、日常会話に関する文を中心に分析と考察を行った

和田・吉里（2022）で、食事場面で用いられる表現について、形容詞はすべてカ語尾へ、否定の助動詞「ない」はすべて方言形ンへ置き換わることを指摘したが、本調査でも同様の結果となった。これに加え、「食欲がない」という状態を「食おゴツナカ（食べたくない）」という否定の意思で表現したり、不可能を意味する「食べキラン（食べられない）」という表現を用いるなど、様々な表現形式が表れ、さらに音変化が加わることで、バリエーションが増える結果となっている。また、否定の助動詞「ない」を含む文においては、直前の格助詞や後続の表現、さらに文末詞等の多様な表現形式に加え、否定の表現を用いず別の表現に変えてしまう例もあった。方言形のオッ取るッ（取れる）やウッツァすれた（忘れた）、耳イラン（聞こえない）等である。このように、基本的に例外なく方言形へ切り換えられる場合であっても、同一文中の他の要素が交替したり、付加されたりすることによって、表現のバリエーションが生み出される要因となっていることが分かった。

さらに、本稿では授与動詞を含む文「娘が買ってくれた」を熊本方言で用いる文に書き換えた結果、遠心的方向のヤル系、求心的方向のクレル系、どちらも用いない無標系の３つが混在している状況であることが明らかとなった。これは九州中部に位置する熊本県が、ヤル系が大勢を占める九州北東部とクレル系が中心の九州南西部の接触地域となっているためであるという日高（2007）の指摘と合致している。また、特にヤル系は、動詞に接続し動作主が他者であることを示す助動詞ラスを用いている例が多い。これは、ヤルは求心的方向にも遠心的方向にも使用できるため、動作主を正確に伝えるための手段としてラスが用いられていると考えることができる。

本調査では、身体や症状などについて「よく聞く熊本方言」への回答を「熊本支援方言プロジェクト：身体語彙図」や『日本語方言大辞典』、『熊本県方言辞典』などと比較し、確認を行った。「熊本支援方言プロジェクト：身体語彙図」との比較では７つの単語について類似の語が発見されたが、『日本語方言大辞典』や『熊本県方言辞典』等では当該の単語がほとんどそのまま掲載されており、「熊本支援方言プロジェクト：身体語彙図」に記載された単語のバリエーションであることが分かった。本調査の回答は、「熊本支援方言プロジェクト：身体語彙図」における回答と同じく、介護施設利用者や職員が日常的な使用を想起する可能性が高い熊本方言であると言うことができる。

最後に、熊本方言に言い換える際に願望や婉曲の意味を担う要素として多用されている接尾辞ゴタルについて音声の面から分析を行った。大庭（2015）でも、熊本方言の語末の /ru/ の音変化が指摘されているが、ゴタルについても同様に、弾き音 [ɾɯ] の他、促音化した [t]、長音の [ta:]、そり舌音的な [ɽ] など多様な音変化が生じていることが分かった。同様に、「～たくない」を意味するゴツナカについても音転化の背景を検討したうえで、変化のバリエーションの特徴を捉えた。これらが、同じ意味であるにもかかわらず、いくつものバリエーションを引き起こす一つの

要因となっている。

熊本方言を用いた表現のバリエーションは多岐にわたり、その特徴をとらえることは容易なことではない。しかしながら、そのバリエーションを構成する方言形式について情報を得ることで、熊本方言話者の発話の意図を類推する力を養うことが可能となり、介護施設において、より正確で円滑なケアの実現が目指せるようになると考えている。

参考文献

秋山正次（1969）「九州方言の各県別解説」『九州方言の基礎的研究』風間書房 p.228

秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本日日新聞社

大庭理恵子（2015）「現代熊本市方言の発音について」『筑紫日本語研究2015』筑紫日本語研究会

神戸宏泰（1992）『研究叢書108九州方言の表現論的研究』和泉書院

九州方言学会編（1991）『九州方言の基礎的研究　改訂版』風間書房

國澤里美・和田礼子・吉里さち子・嵐洋子（2022）「外国人介護士の語りにみられる介護施設内コミュニケーションの困難点」『2022年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.58-63

熊本支援方言プロジェクト（2016）「A40身体語彙表（PDF）」
https://www.fukujo.ac.jp/university/burger_editor/burger_editor/dl/38__YTQw.pdf（2022月11月29日閲覧）

小林隆・篠崎晃一（2005）『ガイドブック　方言研究』ひつじ書房

小学館辞典編集部編（1989）『日本方言大辞典』小学館

日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』，ひつじ書房，pp.109-125，299-321，323-335

藤本憲信（2011）『熊本県方言辞典』創想舎

吉里さち子・和田礼子・國澤里美（2022）「外国人介護職員の日本語理解についての評価とその要因－日本人職員へのアンケート調査の結果から－」『2022年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.64-69

和田礼子・吉里さち子（2022）「方言多用地域における表現の多様性：介護施設利用者が食事場面で使用する方言について」『鹿児島大学総合教育機構紀要』第5号，pp.115-126

Diversity of Expression in Regions Characterized by the Frequent Use of Dialects: Focus on the dialects used by nursing home residents in daily life interactions

Keywords: dialect, foreigners engaged in nursing and caregiving, *"ka" gobi*-dialect forms, postpositional particles/benefactive expressions, phonological changes

This study aims to develop an application for teaching materials to facilitate the learning of dialects. Prior to the preparation of the teaching materials, a questionnaire survey pertaining to the Kumamoto dialect commonly used by nursing home residents, was circulated among the 40 Japanese nursing home employees. They were asked to convert the sentences written in Standard Japanese to the Kumamoto dialect, which is common among nursing home residents.

The results from the dialect sentences used in meal contexts were analyzed in Wada (2022). In this study, "complaints with regard to pain/symptoms," and "daily life" were analyzed.

It was found that all the adjectives belong to the *"ka" gobi* dialect form in both "complaints with regard to pain/symptoms" and "daily life" contexts, which is the same as the results from meal contexts.

Next, regarding grammatical elements, sentences including benefactive expressions in regional dialects such as *"musume ga fuku o katte-kureta* (My daughter bought clothes for me)" vary significantly. Because "*kureru* (do something for me)" also varies to "*kureta* (did something for me)", "*kure-rashita* (did something for me)", there are various combinations.

This paper also verifies a phonetic variation in the suffix "*gotaru*". "*Gotaru*" means (1) "*no yo-da* (it seems like)", (2) "~*tai* (want to)". The results of the questionnaire survey indicate that "*gotaru*" was spelled in several different ways because /ru/ sounds differently depending on the way it is pronounced. The Standard Japanese /r/ is pronounced with flap [ɾ] while the Kumamoto dialect /r/ is pronounced variously, such as retroflex [ɽ], omission or doubling of /r/ sound. As a result, "*gotaru*" varies in a number of ways, such as [gotaɾu][gotaɽu][gotaɽ][gotat][gotaʔ]. Orthographic variants are rarely seen in Standard Japanese.

These results suggest that phonetic variation is one feature of the Kumamoto dialect.